

# 不安の始まるとき

小城 ゆり子

私の生まれたのは昭和十八年十月である。太平洋戦争が始まったのが昭和十六年で、この時は戦争の真っ最中であった。アメリカ軍による日本本土空襲は、十七年にすでに始まっていたが、十九年末ごろから熾烈になり、主要都市がどんどん爆撃されるようになった。私達の住んでいた浦和市（現在のさいたま市浦和区）も、二十年五月には爆撃された。母は、赤ん坊の私を負って逃げた。

その後、父の郷里である新潟に疎開し、八月には戦争は終わった。が、家の近くに学校があり、お昼時にサイレンが鳴る。すると私は泣き出してしまい、母の背にしがみついて逃げよう、逃げようと泣き叫ぶ。大人たちが、もう戦争は終わったんだよ、もう空襲はないんだよ、といくらなだめてもすかしても泣き止まない、伯母の話によると、私はそういう子であったという。

二歳にもならない時の話であるから、覚えているわけではないけれど、記憶していても肉体に刻まれた体験は消えることがない。幼い頃から私は、恐怖におびえ、死におびえる子であった。

夜寝ている時、部屋の天井の模様、木目やしみが、恐ろしい魔物を形作っているように見え、私はその魔物に襲われるようで、恐怖におののく。そして死についても死んだのが何歳の頃かはわからないが、死を恐れるようになった。死……いつか私も死ぬ。自分というものがなくなる。意識がすべてなくなってしまふ……。魂の不滅などは信じられない。自分が死ぬということが怖かった。

そしてやがて思春期を迎える。十二歳で初潮が来、私は自分の肉体に膠着するようになった。足の皮膚がサメ肌でざらざらしている。お風呂に入っていると、母が父に言う声が聞こえた。「サメ肌だなんて、この子も年頃になったら悩むでしょうね」年頃になったら？ 年頃とは何歳からか？ 子どもは大人が考えるよりずっと早くから自分の肉体について悩み始めるのだ。私はすでに悩んでいた。

私が中学生になった頃、小説家になりたいなどと言っていた母が、同人誌を持ってきた。それに、ハンセン病になった人の話が載っていた。ハンセン病は恐ろしいと、母がぶるぶる震えながらその話をする。「この本に触ると、病気がうつるような気

がするんだよ」と言う。ラジオドラマでも、ハンセン病の話が語られていた。肉体が生きながら崩れていく……。ラジオドラマでは、アメリカ人の神父様がハンセン病の患者のために、その施設に入って働き、やがて自分自身もハンセン病に感染してしまふのだ。ハンセン病患者に触れると、うつる。怖い！

夏、皆でお墓参りに行く。一族の墓は、歩いて三十分くらいのところにあった。その墓場に、新しい墓が建てられていた。それを見て、伯母たちがひそひそ話をする。子どもが聞いてはいけない話があるようであった。後で母が、震えながら教えてくれた。「あれは、本家の、ハンセン病になった人の墓なんだ。本家のお婿さんの実家にその病人がいて、本家の息子はその人からうつったんだ。ハンセン病だということ、本家では息子に金をつけて、療養所にやったんだね。その息子が死んだんだろう」

お金を渡したのは、せめてもの親の愛情であったか？ ハンセン病の施設は国が運営していたから、個人のお金はいらないし、個人がお金を持ってもしかたがなかったはずである。これは後で知ったことであるが。

家の近所を白装束の人が歩いていて。母が不安な眼をして言う。「あれは、ハンセン病患者じゃないかね」

ハンセン病になると、体に赤紫の斑点ができ、眉毛が落ちて、触覚が衰えてしまうという。聞きかじりの断片的な知識で私はそれを知った。そして、私は、自分がハンセン病になるんじゃないかと怖れるようになった。自分の肉体が病魔に蝕まれていくような気がした。手足に赤紫の斑点ができ、眉毛が抜け落ち、触覚が衰えた。実際にそういう兆候が出た。腕に蚊がとまっても、蚊がとまったと感じないし、お湯に触れても熱いと感じない。手足の感覚が衰えたのだ。どうしよう、私はハンセン病になったんだ、頭がガンガン痛くなる。私は中学二年になっていた。

私はハンセン病になったと思ひ、それが怖くて、親にも言えず、周囲に悟られないように隠していた。元々は母のノイローゼが感染したのである。母は、自分の不安をよく考えもせずに娘の私にしゃべっていた。後先も考えず、娘を自分の分身にした母であった。

頭が痛い、と訴えた私に父が頭痛薬をくれた。「この薬を飲んでも頭痛が治らなければ、精神病なんだよ」とか言って。薬を飲んでも、治らなかった。が、治らないとは言えなかった。私はハンセン病ノイローゼなのだろうか、と思った。が、ノイ

ローゼと思っても、ハンセン病の怖さは少しも軽減されなかった。いつになったら、このノイローゼから解放されるのか。頭痛は、果てしなく続くようであった。

村の医者に「頭が痛い」と訴えたら、「勉強のしすぎだ」と取り合ってもらえなかった。高校の受け持ち教師に訴えて、「私は将来、精神病になるんじゃないかと思うんです」と言ったが、「そんなことはない」と言下に否定された。私は精神科に連れて行ってほしかったのに。

頭痛は四年間、続いた。高校三年になって、受験勉強に精を出して、ハンセン病も頭痛も忘れようとした。男の子たちに次々と恋をして、病気のことは忘れようとした。そして、これは成功した。

世の中がぱっと明るくなった。私は明朗活発になって、元気になった。当時のマスコミから、ハンセン病は不治の病ではなく、治療をすれば治る病気だと知った。もう怖くなかった。

これは、うつ病が治って躁病が始まる……双極性障害の始まりであったが、十八歳の私は躁病も高じず、平穩に暮らしていた。二十二歳で発作が起きるまで。

現在私は七十一歳なので、その時はもう五十年近くも前になる。その時、学生運動をしていた私は、革命が起きた、と思ったのだ。暴力革命ではなく、平和革命が、人と人とが理解しあうことによって皆で理想の社会を作っていける、そういう革命が起きた、私はその中心にいる、と錯覚したのだ。すっかり有頂天になった私は、興奮し、おしゃべりを続けて、親たちに病院に入院させられた。

躁病の発作は、一月か二月入院していればおさまる。しかし、その反動でうつ病が来ると、憂うつな状態が何年も続く。世の中が真っ暗で、気分が落ち込み、憂うつで憂うつでしょうがない。ただし、後に双極性障害について勉強したところでは、私のうつ病は亢進しないのだとわかった。普通は、憂うつな気分が続くだけではなく、仕事も、何もできなくなるのだ。働くことができず、主婦でも家事ができない。日常生活が送れない。朝起きて、朝食を摂り、家事をし、昼に昼食を摂り、夕方入浴して夕食後に寝る、ということができない。当たり前前の一日の生活が送れなくなる。一日中寝ていて、寝ていても苦しくて寝ることもできない。生活するということができなくて、どうしようもなくなる。少し意欲が湧いてくると、死にたくなっ

て自殺したりする。こういう酷いうつ状態は、私には起きなかった。私は家事もしなくなるということにはなかったし、自殺企図もしたことはない。

うつ病というよりは、神経症に近かった。自分が死ぬ……いつか自分にも死が訪れる。自分の意識というものが、まったくなくなる。目で見、耳で聞き、心で思うことができなくなる。世界がなくなる。否、世界はあっても、自分が感じられないのだから、世界がないと同じなのだ。それが、私には恐ろしい。死ぬのが怖いのだから、当然、自分から死を選ぶなど問題外である。

そして、日常生活の様々なことが不安になる。家を留守にする時、火事や盗難が心配になる。ガスや電気をちゃんと消したか、きちんと戸締りをしたか、やたらに気になる。外出前にガス栓や電気製品の栓をきちんとしたかどうか、気になって、何度も確かめ、何度確かめても気になる。

自分の健康のことが気になって、悪い病気にならないか、心配になる。病気にはなった。双極性障害で二十代、三十代に何度も入退院を繰り返しただけでなく、腎臓も悪くしたし、がんにもなった。五十四歳で子宮体がん、去年七十歳で乳がんになった。心配なのでがん検診にはよく行き、そのためがんは早期発見した。怪我の功名か。

結婚もやっと人並みにできたが、結婚してからも、躁病の発作は起きて、入院した。私の人生は双極性障害の繰り返しだった。躁病とうつ病が繰り返す。でも、この十年以上、双極性障害の繰り返しは起きていない。薬を飲んでいるせいかもしれないが。

うつにもならない。だが、憂うつでもないのに、不安が消えない。死の不安、がんの不安、そして日常の様々な小さなことの不安。

私は不安に苦しんできたので、それでがんになったのだろうか？ 今も不安なのでがんが再発するのだろうか？……精神科医は、「不安でがんになることはありません」と言ったけれど。

幼い時から、老年期の今まで、私の一生は不安の連続だった。それが赤子の時の震災体験に起因するのかどうかはわからないが。